

かささぎ

通信 第100号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2021年 2月 5日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二一年一月の「森三郎の作品を読む会」では

『森三郎童話選集夜長物語』（1996、刈谷市教育委員会）所収の

『ピアノ』（1934.3）『祖母』（1935.1）を読みました。

『ピアノ』は尋常小学校四年の冬のことを、五年後に「私」が回想している形式の作品です。一人称で語られている言葉使いが大変きれいだということが、印象的です。

この作品は『赤い鳥』一九三四年三月号に米川茂子の名前で発表されました。森三郎は『赤い鳥』に本名を含めて四十六の筆名を使って作品を発表していますが、そのうち十三作は、それぞれ別の女性名で書かれています。しかもそれらはほとんど、尋常小学校高学年の少女が友達とのやりとりの中で感じた葛藤を描いています（参照「かささぎ通信」38号、41号）。森三郎は、女性作者の名前で書いた方が自然な流れで読者の共感を呼ぶと考えたのではないのでしょうか。

「読む会」では、作品に描かれたわずかな情報から、当時の女性の進学や結婚の問題、教員採用の仕組みなど、様々な想像を働かせ、話が盛り上がりました。「ピアノ」に登場する吉川先生は、東京の音楽学校を中退して、学年の途中の冬に唱歌専門の先生として「私」の通う小学校に赴任してみえました。先生が音楽学校を中退したのは結婚の準備のためだったと思われるが、ちょうど唱歌の先生が空席になって困っていた小学校にとって、新学期までの短期間の教員の補充として、ピアノを弾ける吉川先生の存在は渡りに船といったところだったでしょう。先生は翌年の春には学校を辞めて朝鮮へお嫁に行きました。

「唱歌」の時間という設定は『赤い鳥』の森三郎作品一一九編の中に、六編ありました。「西瓜」（早川七郎、1933.9）では「その日の、おしまいの授業の三時間目に、私たち男子生徒は体操、女生徒の方は唱歌になりました」と出てきます。

また「さいかち虫」（浅川とき、1934.9）では、六年女組が唱歌会で歌う曲「さいかち虫」（北原白秋作詞、山田耕筈作曲1922）の練習のことが出てきます。「蝶々」（森三郎、1935.10）では唱歌の試験として「たんぽぽ」（西城八十作詞、草川信作曲1921）を歌う場面があります。他にも「ハーモニカ」（森三郎、1933.10）では学校で教わった「からたちの花」（北原白秋作詞、山田耕筈作曲1925）を学校帰りに歌う場面、「杉でつぼろ」（佐久間吉弥、1933.10）では唱歌の時間に校歌の練習をする場面などもあります。これらは森三郎が音楽に興味を持っていたことや、『赤い鳥』の童謡が「唱歌」の時間にも歌われていたことを示しています。

「祖母」は楨二次の名前で、『赤い鳥』一九三五年一月号に発表されました。おばあさんの隠居部屋にかけてある、写真の額にまつわる話です。写真の主は「私」のお父さんの弟で、日露戦争に行つて亡くなった人です。「私」が生まれる前のことです。おばあさんは昔からしつかり者で、「私」を叱る時には、この叔父さんの小さい頃のことをよく引き合いに出しました。ある時、「私」はおばあさんにちよつとしたいたずらをしませんが、自分がしたのだと言い出す機会を逃してしまいます。でも額の中の写真のおじさんはちゃんと見ていて、「このいたずら坊主め」と言っているようです。それからはおじさんがにらんでいるような気がして、「私」は誰もいない時に写真の前で「ごめんさい」と頭を下げたりしました。半年後にはおばあさんは八十三歳で亡くなります。森三郎には日露戦争で亡くなった母方の叔父がいます。日露戦争の五年後に生まれた三郎は、この話と同じように叔父のことは家族の話の中でしか知らなかったわけです。二十七歳の若さで亡くなった息子の事は、生涯祖母の心から離れなかったことでしょう。祖母は八十歳で亡くなります（以上は墓誌及び森銃三の文章から類推）。それが丁度「祖母」を発表する前年の一九三四年一月のことです。写真でしか知らない叔父を題材にした話は、祖母の一周忌の手向けになっていいると思えます。今回の二作は、森三郎の作品のモチーフを探る興味深い作品でした。

次回「森三郎の作品を読む会」の作品（二〇二一年三月十二日実施予定）

「おばあさん」「蛙」（『森三郎童話選集夜長物語』所収）